私の名前

中学二年　Ｏ・Ｍ

「松山湊太選手が三着でフィニッシュです。全国三位の泳ぎを見せてくれました。」

実況の入っているビデオ、これを何回見ただろうか。私との才能の差を見せつけるようでとても苦しい。

「えみちゃん。やっぱり何度見ても君のお父さんはすごいな。」

となりにいた堀本翔おじさんがこう言った。そう。松山湊太は私の父である。

私の父は、背泳ぎの百メートルで高校生の時全国大会に出場し、三位に入賞した。水泳を始めたのが他の人より遅かったこともあり、当時は「生まれつきの才能」だと注目をあびた。そして彼の子ども、私にも注目は集まった。

周囲に期待され、私が水泳を始めたのは四才。

「なんせ、名前が『彗夢（えみ）』だもんね。」

当時はよく分からなかったが、周りの大人は私の名前についていつも話していた。少しめずらしい漢字の名前だから話されているのかと考えたが、今は理由がわかる。私の名の漢字を音読みすると「スイム」なのだ。

沢山の人に期待され、ある程度の才能が水泳にあると私も信じこんでいたが、二年続けても周りの子と進度は変わらない。名前が「スイム」なのに私には水泳の「生まれつきの才能」が無かった。

時が過ぎ、私は小学六年生になった。周りからの期待の目も完全に無くなり、普通の毎日を送っていた。今日は小学校最後の部活選びの日。熱中しているものが無いので、親友の佐藤和子と同じ陸上クラブに入った。もともと走ることが嫌いで気はあまり進まなかったが、「和子と同じならいいかな。」ぐらいの気持ちだった。クラブ初日は五十メートル走のタイムを測定した。本気で走るのは初めてだった。走ると部員からどよめきがあがった。皆の声の意味もよく

分からずにタイムを見ると、それは思いもしない好タイムだった。
何回かクラブに出て色々な練習をすると、自分の足がぐんぐん速くなっていくことが分かる。いつの間にか私は走ることが大好きになっていた。ある日クラブの先生に、クラブチームに入ることをすすめられた。チームには入ってみたいが、父と母に何と言えば良いのか分からない。なんせ、私の名は「彗夢」なのだから。
先生にクラブチームをすすめられてから一日が経ったが、まだ両親にこのことを話せていない。どのタイミングで話し始めれば良いのか、いまだに迷っていた。悩んでいることが顔にも出ていたのか、母が話しかけてきた。
「どうしたの？」
今言うべきなのかよく分からなかったが、言ってしまうことにした。
「実は…陸上のクラブチームに入りたいと思っているの。」
この言葉を言えてホッとしたのと同時に、母の反応が怖くなって私は顔を上げられなかった。昔、水泳で母からの期待にこたえられなかったからだ。何秒か無言が続き、無理なんだと思った瞬間、母が
「いいよ。」
と言った。最初はうそかと思ったが、顔を上げて見えた母の顔は真剣だった。
夕食中母と父が話し合い、本当にクラブチームに入れることになった。小さい頃、水泳が上手くないと分かった時、父と母に何と謝ればいいのか幼いながらに悩み、それ以来、他のスポーツに目を向けないことにしていた私。この時は
「本当にいいの？」
と何度も訊き直してしまった。本当にやっていいと分かった時、私はとてもワクワクしていた。久しぶりに新たなスポーツに挑戦できると考えると胸がたかなったのだ。
この日の六日後にクラブチームに入った。早くも大会があるので、雰囲気を知るだけでもいいということで出場することにした。大会に向けて、少ないが二回練習した。

そして初めての大会当日。緊張して眠れないかと思ったが、意外といつも通りに朝を迎えることができた。電車に乗って、大会が行われる競技場の最寄り駅に向かった。駅に着くと陸上の格好をしている人が沢山いて、少しドキドキした。改札を出るとクラブで仲良くなった優愛ちゃんがいて、手をふってきてくれた。私は六年女子の百メートルにエントリーしたので、同じ競技の優愛ちゃんと話す機会があり、仲良くなれたのだ。優愛ちゃんと一緒に競技場へ行った。ここから競技への準備などをしていくと、意外とすぐに競技時刻となった。私は大会に出るのは初めてなので走る順番は後ろの方だが、優愛ちゃんは最初から二番目だった。二組目が走り始める。優愛ちゃんが一位だったことが後ろからも分かった。プレッシャーを感じていたら私の番になっていた。

「パン」

スタートの音に少し驚きスタートは遅れたが、スピードにのれて一位でゴールした。そして入賞もできた。この日、私はずっと陸上をやっていきたいと思えた。

初めての大会から四年がたち、私は高校一年生になった。初めて大会に出た時の気持ちを忘れずに今日まで陸上を続けてきた。そして私はインターハイに出場できるようになった。

種目は変わらず百メートル。インターハイで、私は予選、準決勝を勝ち抜き、最後の八人に残った。そして今日が運命の日、決勝だ。今まで多くの大会に出場してきたが、今日は特段に緊張する。一緒に走る七人の中に優愛がいる。さっき、ワンツーフィニッシュすることを約束した。

走る前になって様ざまな思いがこみあげてきた。水泳が上手くいかず、父との比較に苦しんだ毎日。そこから陸上と出会った日。初めて出た大会の空気。そしてずっと悩まされ、辛かった自分の名前。色んなことがあったからこそ、今の私があると思う。辛かったことも全てをパワーに変え、全力を出しきろうと決めた。私は人の期待のためではなく、自分のために頑張ろう。「松山湊太の娘だからでは

なく、松山彗夢として優勝したい」と、強く思った。
スタート位置に立つ。百メートルがいつもより短く見えるのは気のせいだろうか。深呼吸をして、スタートの姿勢をつくった。
「パン」
スタート合図がなった。一心不乱にゴールだけを考えて走った。前へ、前へ。そしてゴールした。レースが一瞬にして終わったように思えた。結果、私は二位で優愛は四位だった。ワンツーフィニッシュの約束は果たせなかった。一位の人は村野涼華という人で、四年生から陸上を始め、全国大会でいつも上位の人だった。一位になれなかったことで、むなしさ、悔しさで胸が一杯になり、レース後から家に帰るまでの記憶はあまり無い。その日はすぐに寝た。
翌日。朝食を食べようとした時、父が話しかけてきた。
「えみ。昨日はお疲れさま。すごかった。見に行けなくてごめんね。」
「うん。大丈夫。」
最近練習が多くてなのか、父と全然話していなかったことに、ふと気付いた。
「それで、ちょっと前にママから言われて気付いたことがあって、えみの名前を音読みすると『スイム』になるなって。」
「え…。」
「偶然そうなっちゃったけど、もしえみがそれで悩んでいたら悪いなと思って。」
まさか、偶然な訳がないと思った私に、父が紙を差し出した。
「これ、ママと二人でえみの名前を考えた時に使った紙で、今も残してあるものだよ。ちょっと見る？」
「うん。」
紙の下の方を見ると、「『彗夢』…夢をみれる星のように輝く子になって欲しい」と書いてあった。嬉しかった。「私の名前にそんな意味がこめられていたなんて。」と。泣きそうになったので下を向きながら
「ありがとう、お父さん。」

と一言だけ言った。父はそれっきり何も言わないでとなりにいてくれた。

朝食を食べた後、私が出たインターハイのテレビ放送を見た。本来は動画で自分や周りの走りを研究しなくてはならないのだが、私はなぜか実況に意識がいっていた。この実況者は選手の名前を使って実況するのが上手だということを知っていたからだ。映像で八人が走り出した。私の名前をどうやって実況するのか、思った以上に気になった。実況者のきれいな声が心にスッと入っていく。

「陸上界に彗星のごとく現れた松山選手、夢へ向かって全力疾走しています！」

あぁ。なんて上手な実況だろう。この実況は私を解放してくれた。名前でこんなに悩まなくてもよかったんだ。「松山彗夢」、私は自分の名前が世界で一番良い名前に思えてきた。この名前を大切にしよう。この名前を世界にとどろかせたい。それを叶えるべく、私は練習しようと、外にとび出した。